

障害学生支援に関する授業担当教員アンケート (令和2年度)

1. 実施の目的

今後の障害学生支援活動の充実や方向性を検討するため、障害のある学生が受講する授業の担当教員へアンケート調査を実施し、障害学生支援センターで提供している合理的配慮や取り組みの有効性について検討した。

2. 方法

令和2年度前期・後期において本学で開講された授業のうち、障害のある学生が受講した授業の担当教員118名(常勤78名、非常勤40名)を対象に、令和3年1~2月にかけて、郵送によるアンケート調査を実施した。そのうち、42名から回答を得た(回収率35.6%)。なお、回答者は常勤教員27名(34.6%)、非常勤講師15名(37.5%)であった。

3. 結果および概要

各質問項目の結果は以下の通りである。

「問① 担当した授業(障害のある学生が受講した授業)について」

担当した授業における障害のある学生の障害種(複数回答)を尋ねたところ、視覚障害9件(17%)、聴覚障害23件(45%)、病弱・身体虚弱3件(6%)、発達障害7件(14%)、精神障害7件(14%)、障害名不明2件(4%)であった(図4-1)。

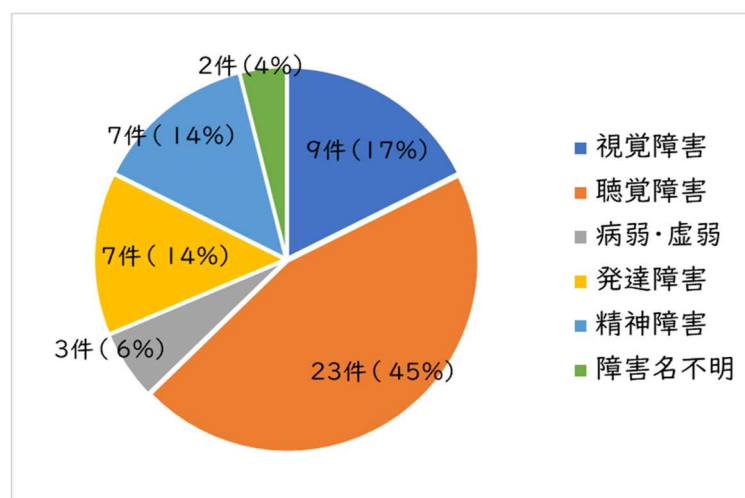


図4-1 支援件数とその割合

授業を担当している障害のある学生へ行った配慮について、選択するように求めた結果を図 4-2～図 4-5 に示す。

視覚障害のある学生への配慮として「教材の拡大（11 件）」が最も多く、「教材のテキストデータ化（2 件）」、「その他（2 件）」と続いた（図 4-2）。

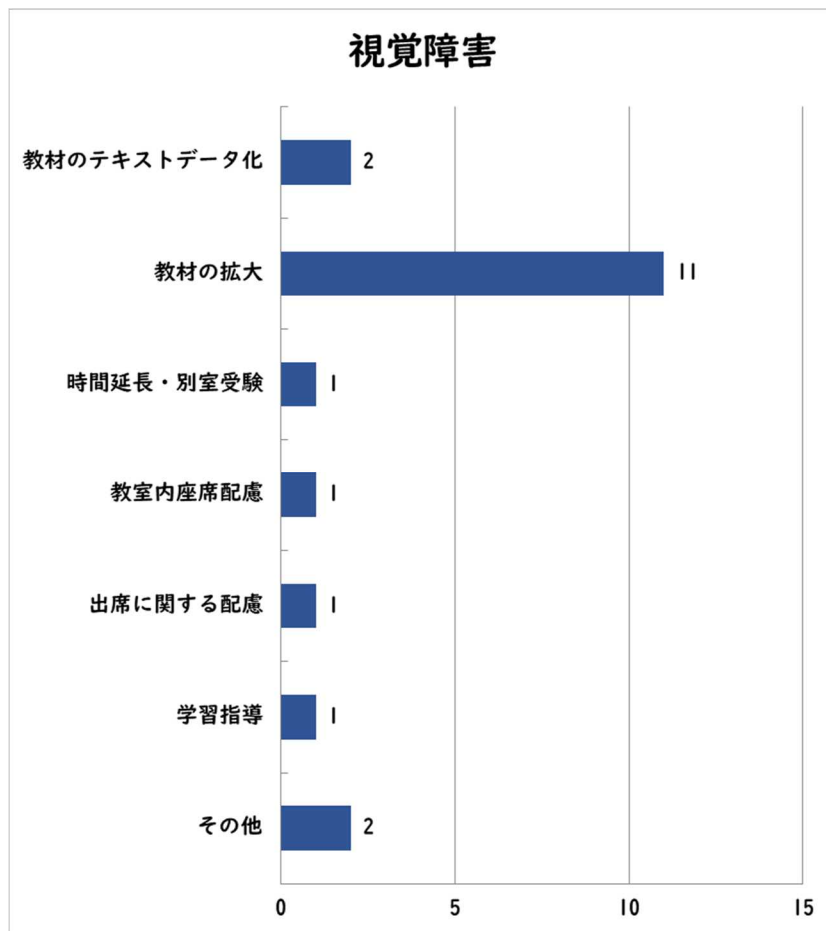


図 4-2 視覚障害のある学生へ行った配慮

聴覚障害のある学生への配慮では、「教材のテキストデータ化（9件）」が最も多く、続いて「ノート・PCテイク（6件）」「視聴覚教材字幕付け（4件）」と続いた（図4-3）。

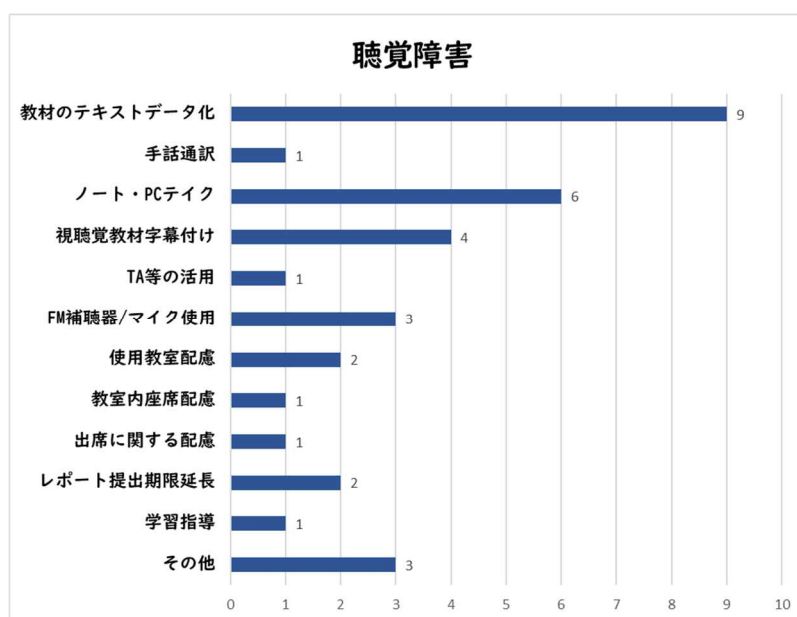


図4-3 聴覚障害のある学生へ行った配慮

発達障害のある学生への配慮として「その他（5件）」が最も多く、オンライン授業の際のスライドの工夫や当該学生へ直接確認するなど個別の配慮が行われた。音声認識ソフト利用の際のマイク使用のため「FM補聴器/マイク使用（3件）」と続き、「教材のテキストデータ化（2件）」「出席に関する配慮（2件）」と続いた（図4-4）。

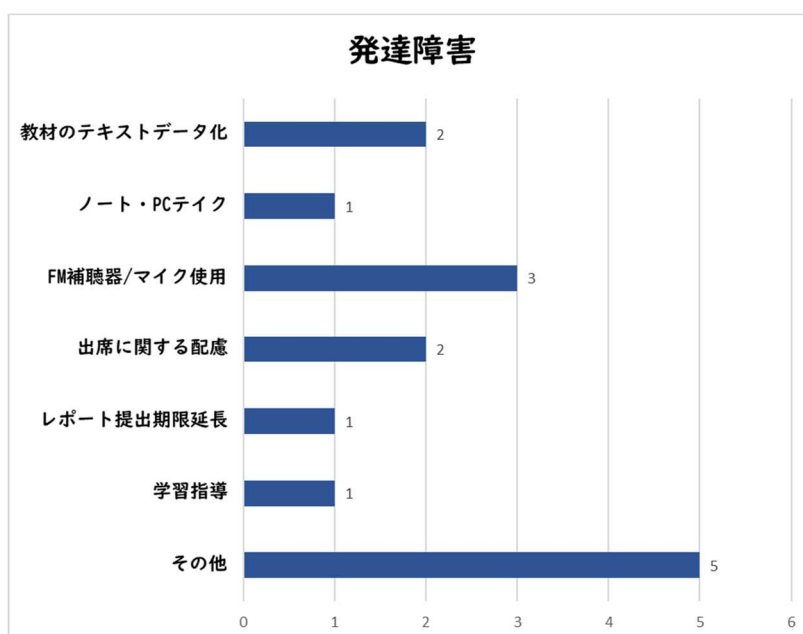


図4-4 発達障害のある学生へ行った配慮

病弱・虚弱の学生、精神障害のある学生および障害名が分からないと授業担当教員より回答のあった学生に対する配慮を図 4-5 に示す。

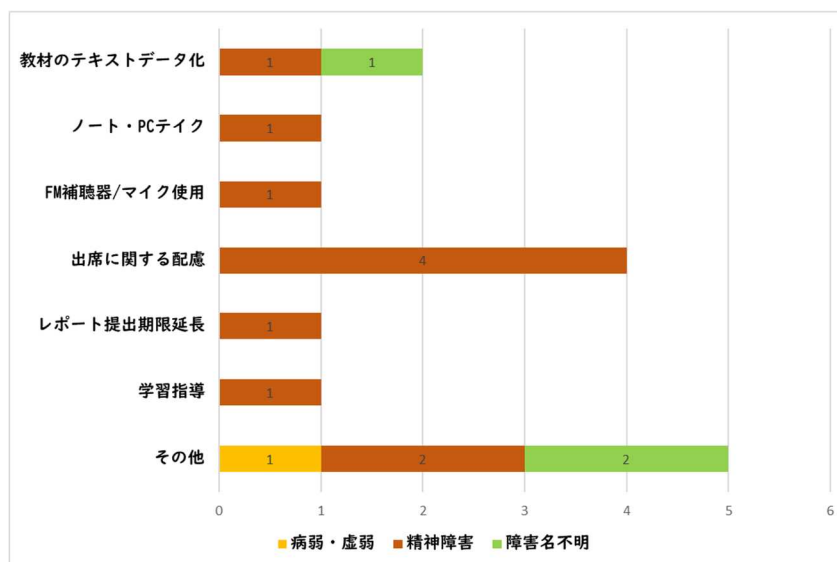


図 4-5 病弱・虚弱の学生、精神障害のある学生および障害名不明の学生へ行った配慮

以上の結果から、視覚障害のある学生および発達障害のある学生への配慮としては「教材の拡大」の件数が多く、聴覚障害のある学生への配慮としては「教材のテキストデータ化」「ノート・パソコンテイク」が令和 2 年度は最も件数が多かった。また、「出席に関する配慮」については障害種に関わらず全体的に行われた。

「問② 障害学生支援センターが提供している支援（パソコンテイク、字幕挿入、情報提供等）は適切であったと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図 4-6 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」という回答が 21 名、「少しそう思う」という回答が 3 名と、障害学生支援センターで行っている配慮に一定の評価が得られたと考えられる。

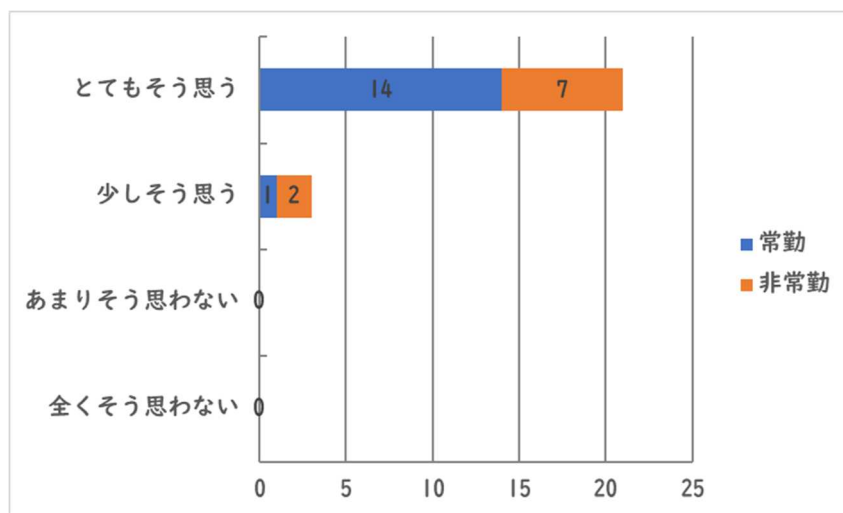


図 4-6 障害学生支援センターが提供した支援は適切だったと思うか

「問③ 障害のある学生への配慮は、授業の達成目標という観点から見て十分だと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図 4-7 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」という回答が 15 名と最も多く、次いで「少しそう思う」という回答が 12 名であった。

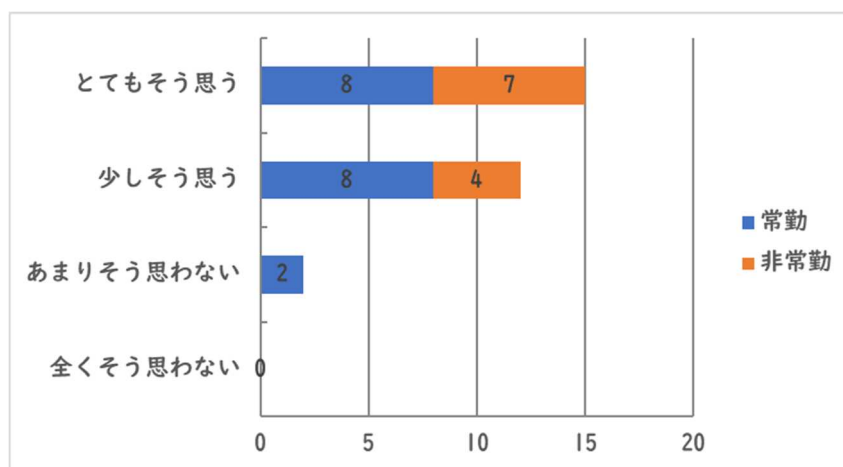


図 4-7 障害のある学生への配慮は授業の達成目標という観点から見て十分だと思うか

「問④ 障害のある学生に授業を行うことで、授業のユニバーサル化が進んだと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図4-8のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が6名、「少しそう思う」が16名であった一方、「あまりそう思わない」と回答した人数は2名、「全くそう思わない」と回答した人数は1名であった。

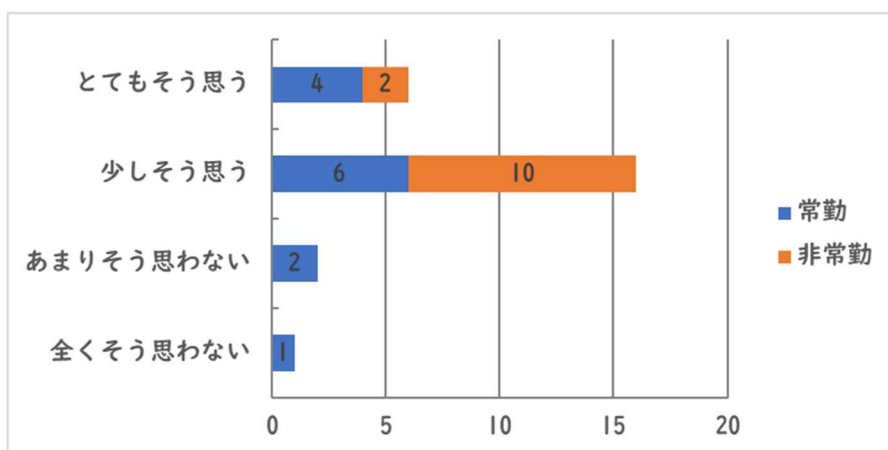


図4-8 障害のある学生に授業を行うことで、授業のユニバーサル化が進んだと思うか

「問⑤ 障害のある学生へ授業を行っていくうえでFDが必要だと思いませんか。」

上記について尋ねたところ、図4-9のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が15名、「少しそう思う」が11名、「あまりそう思わない」が2名であった。

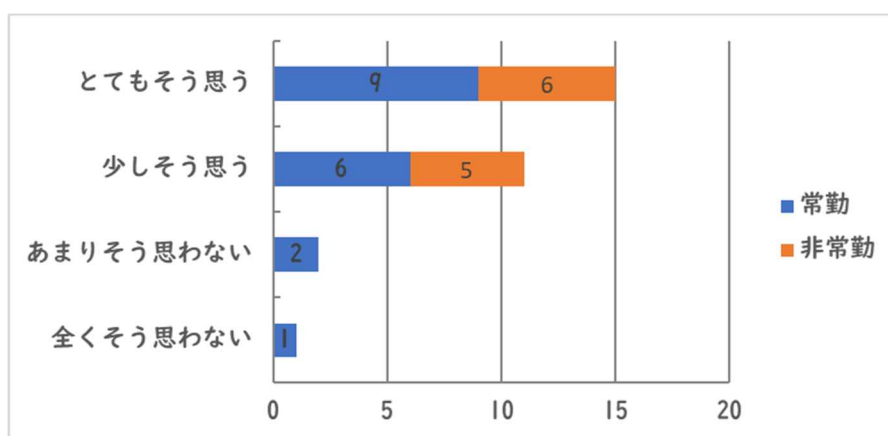


図4-9 障害のある学生へ授業を行っていくうえで、FDが必要だと思うか

「問⑥ 障害のある学生への支援を行うにあたってうまくいかなかった授業はありますか。」

上記について尋ねたところ、図4-10のような結果が得られた。回答者全体でみると「毎回あった」が0名、「しばしばあった」が2名、「たまにあった」が6名、「全くなかった」が11名であった。授業を行うにあたってうまくいかないことがほとんどなかったと考えている授業担当教員がいる一方、うまくいかなかったと感じている教員も一定数存在した。

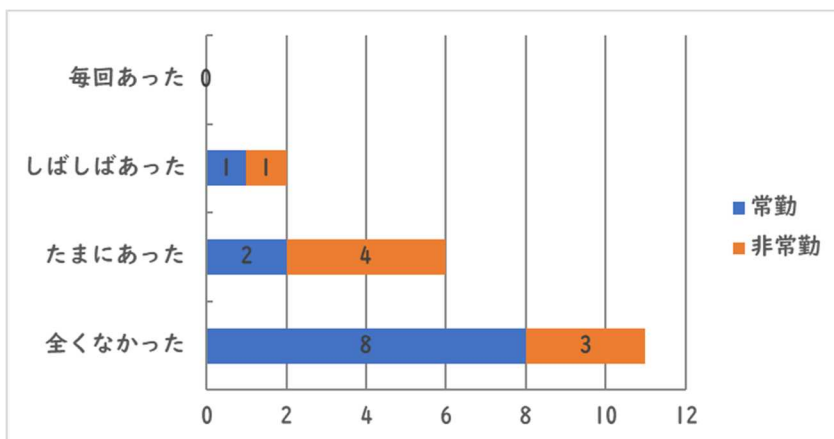
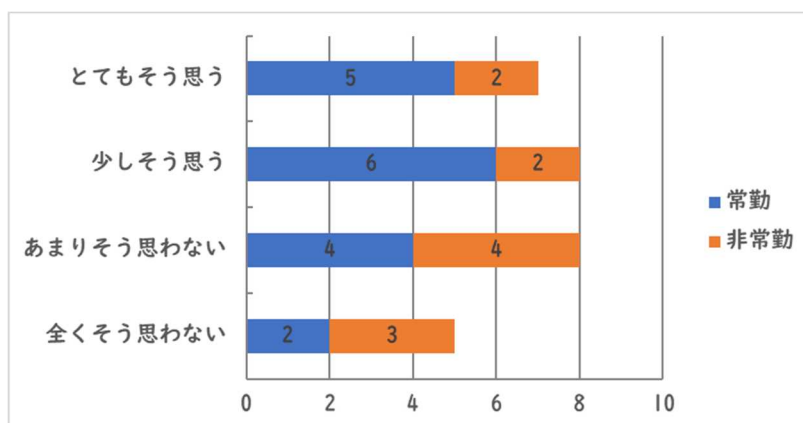


図4-10 障害のある学生の支援を行うにあたって、うまくいかなかった授業があったか

「問⑦ 障害のある学生が自分の必要な配慮事項について、能動的に先生方に伝えたいと思いますか。」

上記の問いに対して、図4-11のような結果が得られた。「とてもそう思う」が7名、「少しそう思う」が8名、「あまりそう思わない」が8名、「全くそう思わない」が5名であった。学生に対して授業の初回に配慮依頼文書を説明するよう指導を行っており、引き続き行っていく必要性が示唆された。



問4-11 障害のある学生が自分に必要な配慮事項を能動的に伝えていたか

「問⑧ 障害学生支援センターより送付した、障害のある学生への配慮依頼文書は十分に理解されましたか。」

上記について尋ねたところ、図4-12のような結果が得られた。「とてもそう思う」と回答した教員が21名、「少しそう思う」が10名であり、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」が0名であった。障害学生支援センターより送付している、障害のある学生への配慮依頼文書について、授業担当教員より概ね理解が得られたと考えられる。

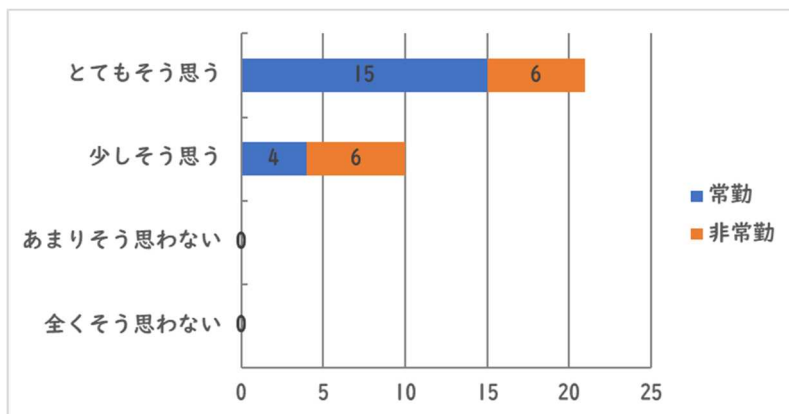


図4-12 配慮依頼文書は十分に理解できたか

本アンケート調査の結果をふまえて、引き続き授業担当教員と障害学生支援センターで支援方法についての情報共有、及び連携の必要性が状況に応じて求められる。障害学生支援センターが提供している支援を継続していくため、それぞれの障害種に合わせたサポートを行うと共に、パソコンテイク入門講座や字幕挿入の入門講座などを開催し、支援学生の確保とスキルの継続を行っていく必要がある。